

6・17総決起集会に220人

信楽高校を分校にするな

全国から募集して大学とも連携を

地場産業と結びついた信楽高校の未来を熱く語る、今は住職の同校卒業生。「少人数で、子どもが自分の良さを発揮し成長している。子どもと大人の思いがリンクすれば、新しいものが生まれる。大人が本気でチャレンジする姿を示すことが、分校化を止める原動力だ」と語る1年生の母親。

6月17日、信楽開発センターで開かれた「信楽高校の分校化を許さない総決起集会」には、議会関係者を含む220人を超える住民が参加。市長は「分校化阻止に、体を張って頑張りたい」と力強い決意を述べました。

信楽高に在学した、元小結の岡本さん(三杉里)と『たねや』の山本さん兄弟がビデオレターで参加。集会では、世代を超え陶芸の町の住民の思いが1つになり分校化を止める力強い狼煙となりました。集会のハイライトを再現します。

表は、学校と共に歩んできた、陶器の町信楽としては到底受け入れがたい。私たちの申し入れでは、慎重だった河原教育長は、12日、突然「原案が妥当」との見解を示した。甲賀市は最後までたたかう。

山添さん(信楽高卒業生) 1983年に入學、普通科の第2期生。入學の動機は野球、1年生からレギュラーになった。でも青春の思い出だけでは分校化は阻止できない。セラミック科とデザイン科は地場産業と結びついた信楽だからこそ出来た科だ。普通科だけなら、水口、水口東、石部へ行けばいいとなったがもし、全国に9校あり、地場産業と結びついている。こういう所との連携も面白い。有田、常滑、日本の中の留学生、県境の伊賀

分校化に対する私たちの対案

寺田さん(信楽高校を守り発展させる会代表) 再編原案には、信楽高が果たした役割の評価がない。分校時代に生徒がどれだけの思いをしたのか総括がない。白紙撤回を求めて、学校関係者、地場産業など

8団体で「信楽高校を守り、より発展させる会」を発足させて、8456筆の署名を知事と教育長に渡した。市議会は全会一致で分校化反対決議を採択した。5月の22日、河原教育長と面談し、分校化ではなく私たちの対案によって信楽高校を生き残らせることを訴えた。セラミック科とデザイン

甲賀市は 最後までたたかう 岩田甲賀市議会議長 信楽高校は昭和48年に独立校となり39年間、独自の校風を築きあげた。突然の再編計画案の発

「校舎」時代の悔しさ 独自の学校新聞発行 藤田さん(信楽高卒業生) 昭和32年の卒業生。当時は甲南高校の信楽校舎で校長先生がおらず、本校との落差を感じた。信楽独自の学校新聞をつくらうと新聞部をつくった。私が部長になった。ところが、本校に行くところだけ空けてあるから埋めよと言われる。私たちのスペースはほん

の僅かだった。先生に1万円もらって、自分たちの思いを載せたタブロイド判の第1号をつくった。セラミック科は 信楽だから出来た



老若男女が220人 町民も議会関係者も思いは1つ

陶芸の町住民の思いが1つに

からの入学があってもいい。京都の5つの芸術系大学との連携も楽しい。伝統工芸師さんの力で次代の工芸師を育成する。若手の工芸師、芸術家も、たくさん来て住んでいる。その人たちの力を借りる。21世紀を背負う若い人たちは、そんな案をたくさん持っている。

皆さんの力が一つになれば分校化が阻止できる。少人数の中で 自分が変わった

宮原さん(PTA母親代表) 娘は、好きなデザインを勉強したいと信楽に入學し、来てよかったと言っ

ている。娘の先輩たちも、信楽で先生方に丁寧に指導していただき、少人数の中で自分の良さを発揮し力を伸ばし、自分が変わっていった。これは信楽高校ならではの良さだ。県の言う「魅力と活力ある学校」は、信楽高校の目標そのものだ。分校化はそれをつぶす。その子どもたちと大人たちの思いがリンクすれば、新しいものが生まれ

高畑さん(区長会長) 信楽高原鉄道の収入の7割以上は生徒の定期券だ。これが無くなると鉄

から、そのためには、大人が本気でチャレンジする姿を示すこと。これが分校化を止める原動力だ。「お母さん本気やなあ」と思ってもらうように頑張りたい。

収入の7割以上は 生徒の定期券

力土も社長も ビデオレターで参加

発言のあと、3人のビデオレターが上映された。岡本さん(信楽高校出身元小結三杉里) 思いは、陶器づくり、と厳しい相撲の練習、学校の前のおばちゃんラーメンの味。信楽高校が心

配。東京から応援します山本さん(たねや社長) 信楽のデザインを学んだことが誇りだ。是非とも信楽高校を残していただきたい。私も出来るだけ発信し、支援したい。山本さん(クラブハリエ社長) 2010年、ワールドテイスト大会で世界チャンピオン) 1991年卒業。信楽で専門的なことを学び、就職して自分でデザインするようになった。おかげで、世界大会に出場できた。デザインが自分の生活の基本になっている。信楽高校に行っていないければ今の自分はない。

大人が本気でチャレンジする姿を

5月5日、日本中の原発がすべて止まった。何とも心地のいい安心感をもった。これでは永久に原発が動かなくなる。危機感を抱いた政府と電力会社は焦った。事故直後、菅首相は地震の可能性の高い浜岡原発を止めさせた。「原発に依存しない社会を」と原発ゼロへの志向を強めた。それでも、海江田経産相が「安全を確保して順次再稼働をすすめる」と言ったとき「自分も同じだ」と同調した。菅さんでも「危ない」と見た原子力村の人たちが官降ろしに走った。新首相の口からは「原発に依存しない」は消え「再稼働」の言葉が踊った。でも、国民の命を大事にする思いは日増しに高まった。この風圧に逆らうことは、野田さんだけでは無理だった。助け船を出し、潮目を変えたのが5月30日の「関西広域連合」の会合だ。理解不能な声明で大飯原発の再稼働を容認した。野田首相は一瀉千里で再稼働を決定し連立準備に入った。それまで、橋下市長や嘉田知事は再稼働に反対し近畿住民の声を代弁するかのよう振る舞った。「被害地元」と言う言葉まで編み出した。独立の規制機関、免震重要棟、防潮堤のかさ上げがない。電力不足は根拠がないと、政府を批判した。彼らは経済界と懇談を重ねていた。法的根拠をもたない関西広域連合を隠れ蓑にして、関西の住民の思いを裏切ってしまった。再稼働を認めたら上で「運転は夏休みまで」と言ってもアライバイ作りの政治家の思惑を超え「原発よりも命」の思いは広がる。22日、ツイッターで繋がった青年など45000人が首相官邸を包囲した。7月16日、また大きな急流が始まる。